

第二章 國祖御隱退の御因縁 (二)

大国常立尊の御神力によりて、天地はここに剖判し、太陽、太陰、大地の分担神が定まつたことは、前述したとおりである。しかしして太陽の靈界は伊邪那岐命これを司りたまひ、その現界は、天照大神これを主宰したまうのである。次に太陰の靈界は、伊邪那美命これを司りたまひ、その現界は、月夜見之命これを主宰したまう。大地の靈界は前述のごとくに大国常立命之を司りたまひ、その大海原は日之大神の命によりて須佐之男命これを主宰したまう神定めとなつた。

しかしるに太陽界と、大地球界とは鏡を合したように、同一状態に混乱紛糾の状態を現出した。太陰の世界のみは、現幽両界ともに元のままに、平和に治まっている。ひとり太陰に限つて、なぜ今でも平和に治まっているかと言へば、この理は月の形を地上から観測しても明らかである如く、光はあれども酷烈ならず、水気はあつても極寒ではない。実に寒暑の中庸を得たる至善至美の世界であるからである。これに反して太陽の世界は、非常に凡てのものが峻烈で光は鮮かであり、六合に照徹する神力はあれども、それだけまた暗黒なる陰影が多い。しかししてまた大地は、もとより混濁せる分子の凝り固まつてきたものであるから、勢として不浄分子が多い。したがつてまた邪神の發生するのも、やむを得ない次

※大海原……一般には広びろとした海、海洋を言いますが、神示によれば地球の総称、あるいは全地球の国土および天界の国土とあります。

※日之大神の命……大国常立大神のご命令。主神の命。

※六合に照徹する神力……「六合」は天地と四方を并せて六方になり、すべてを照しつくす偉大な力。

第である。

そこで稚姫君命は、天稚彦と共に神命を奉じて天に上り、天界の神政を司ろうとしたもうたが、御昇天の途上において、地上からつき従った邪神どもにあやまられ、天地経綸の機織の仕組を仕損じたまい、ついに地上に降りたまいで国常立命と共に地底に潜ませられ、あらゆる艱難苦勞を忍びたまうの巳むを得ざるに立ちいたった。稚姫君命の御失敗の因縁については、後日詳しく述べることにする。

さて、国常立命は天地間の混乱状態邪悪分子をば掃蕩して、最初の神界の御目的どおりの幽政を布こうと遊ばしたもうた。これについて国祖は、まず坤金神を内助の役として種々の神策を企図したまい、また、大八洲彦命を天使長兼宰相の地位に立たして、非常に厳格な規則正しき政を行い、天の律法を制定して、寸毫といえども天則に干犯するものは、罰するというに定めたもうた。そのために地上の年数にして数百年の間は非常に立派に神政が治まっていたが、世が次第に開けゆくにつれて、神界、幽界、現界ともに邪悪分子が殖えてきた。すなわち八百万の神人は、日増に大神の御幽政に対する不服を訴うるようになり、山川草木にいたるまで言問いあげつらう世になった。

そこでやむを得ず宰相大八洲彦命は、国常立尊の御意志に背くと知りつつも、和光同塵の神策をほどこし、言問い、論争う八百万の神々を鎮定慰撫しつつ、ともかくも世を治めてゆかれたのである。

※大八洲彦命……素盞鳴尊の分霊で、天使長兼宰相として国常立尊の神示・経綸のまにまに地上天国を樹立するために活躍された。靈国の宣伝使で、神名は月照彦命。豊国主尊一名国大立命(素盞鳴尊)の和魂。後世釈迦と生まれて仏教を開いた。

※和光同塵の神策……神理神教を時代相応に具現しつつ、理想世界を実現してゆく神策。

しかるにこのとき靈界は、ほとんど四分五裂の勢となり、一方には盤古大神（又の御名塩長彦）を擁立して、幽政を主宰せしめむとする一派を生じ、他方には、大自在天神大國彦を押し立てて神政を支配し、地の高天原を占領せむとする神人の集団が出現し、その他諸々の神々の小集団は、或いは盤古大神派に、或いは大自在天神派に附随せむとし、また中には、この両派に属せずして中立しながら、國常立尊の神政に反対する神々も生じてきた。

そこで國常立尊はやむを得ず天に向つて救援をお請いになった。天では天照大御神、日の大神（伊邪那岐尊）、月の大神（伊邪那美尊）、この三体の大神が、地の高天原に御降臨あそばし給ひ、國常立尊の神政および幽政のお手伝いを遊ばされることになった。國常立尊は畏れ謹み、瑞の御舎を仕えまつりて、三体の大神を奉迎したもうた。然るところ、地上は國常立尊の御系統は非常に減少して勢力を失ひ、盤古大神および大自在天神の勢力はなほだ侮り難く、ついには國常立尊に対して、御退位をお迫り申すようになった。天の御三体の大神は、地上の暴悪なる神々にむかつて、あるいは宥め、或いは訓し、天則に従うべきことを懇に説きたもうた。されど、時節は悪神に有利にして、いわゆる……悪盛んにして天に勝つ……という状態に立ちいたつた。

ここに國常立尊は神議りに議られ、髪を抜きとり、手を切りとり、骨を断ち、筋を千切り、手足所を異にするような惨酷な処刑を甘んじて受けたもうた。されど尊は実に宇宙の

※盤古大神塩長彦……伊邪那岐大神の直系で、現今の中国の北方に生まれた人間姿の神人で、國常立尊の後を襲うた神。のち盤古神王と改称。

※大自在天大國彦……天王星から北米に降つた豪勇の神人で、大自在天と略称する。仏典では波羅門教徒が世界万物の造物主・世界の本体と仰ぐ。つまりバラモン教の本尊。

大原靈神にましませば、一旦肉体は四分五裂するとも、直ちにもとの肉体に復りたまひ、決して滅びたまうということはない。

暴悪なる神々は盤古大神と大自在天神とを押し立て、遮二無二におのが要求を貫徹せむとし、ついには天の御三体の大神様の御舎まで汚し奉るといふことになり、国常立尊に退隱の御命令を下し給わむことを要請した。さて天の御三体の大神様は、君系であり、国常立尊は臣系となつていらるるが、元来は大国常立尊は元の祖神であらせたまひ、御三体の大神様といえども、元来は国常立尊の生みたまつた御関係が坐します故、天の大神様も御真情としては、国常立尊を退隱せしむるに忍びずと考へたまつたなれど、ここに時節の已むなきを覺りたまひ、涙を流しつゝ勇猛心を振起したまひ、すべての骨肉の情をすて、しばらく八百万の神々の進言を、御採用あらせらるることになつた。そのとき天の大神様は、国祖に対して後日の再起を以心伝的に言い含めたまひて、国常立尊に御退隱をお命じになり、天に御帰還遊ばされた。

その後、盤古大神を擁立する一派と、大自在天神を押し立てる一派とは、烈しく覇権を争ひ、ついに盤古大神の党派が勝ち幽政の全権を握ることになつた。一方国常立尊は自分の妻神 坤 金神と、大地の主宰神金勝要神および宰相神大八洲彦命その他の有力なる神人と共に、わびしく配所に退去し給うた。

地上の神界の主宰たる大神さえ、かくのごとく御退隱になるといふ有様であるから、地上

※国常立尊……(二二章)での国常立尊は、その退隱のご状況から推測して須佐之男命と同体神のことと思われる。

の主宰たる須佐之男命も亦、八百万の神々に、神退いに退わるるの已むなきにいたりたまい、自転倒嶋を立去りて、世界のはしほしに漂泊の旅をつづけられることになった。しかし須佐之男命は、現界において八岐大蛇を平げ地上を清め、天照大御神にお目にかけて給うたと同じように、神界においても、すべての悪神を掃蕩して地上を天下泰平に治め、御三体の大神様にお目につけて、地上の主宰の大神となり給うたのである。

さて、自分はこのから国常立尊随従の八百万の神人の中でも、主なる神司の御経歴御活動を述べ、また盤古大神および大自在天神を擁立せる一派の八百万の神々の経歴および暴動振りを、神界にて目撃せるままを述べておこうと思う。

(大正一〇・一〇・二〇 旧九・二〇 谷口正治録)

瑞 月

追々と火星は天地に近づきぬ

心ゆるすな四方の国人